

貧 血 検 査

動 向

平成13年度における貧血検査の実施件数は、77校16,293名であった。昨年より9校2,075名の減少であった。近年中学校における健康管理方法の見直しや生徒数の減少の傾向がみられる。

一方、県立・私立高校を中心に成長期における生徒の健康状態把握のため貧血検査の導入を図っている。

今後、思春期における健康管理体制の一貫として貧血検査を導入し、他の検査と総合して個人の健康を考えていくことが望まれる。

方法と結果

学校貧血検査は図Bに示すように、自動血球計数機ベックマン・コールターSTKSを用い血色素量、ヘマトクリット値、赤血球数、白血球数を同時に測定し、「異常なし」「要注意」「要治療」の3群に分け判定を行っている。判定基準値は表5（P222）に掲げた。

中学生の貧血検査結果を市町村別にまとめ図Aに示した。清川村の女子の要受診率、男子の要注意率が高値となっているが、受検者数が少数のため割合が高くなったと考えられる。他の市町村の要受診、要注意率の傾向は昨年とほぼ同様であった。中学生全体の要受診率は、男子2,339名中5名で0.2%、女子は2,110名中40名で1.9%であった。昨年の男子0.4%、女子1.6%と

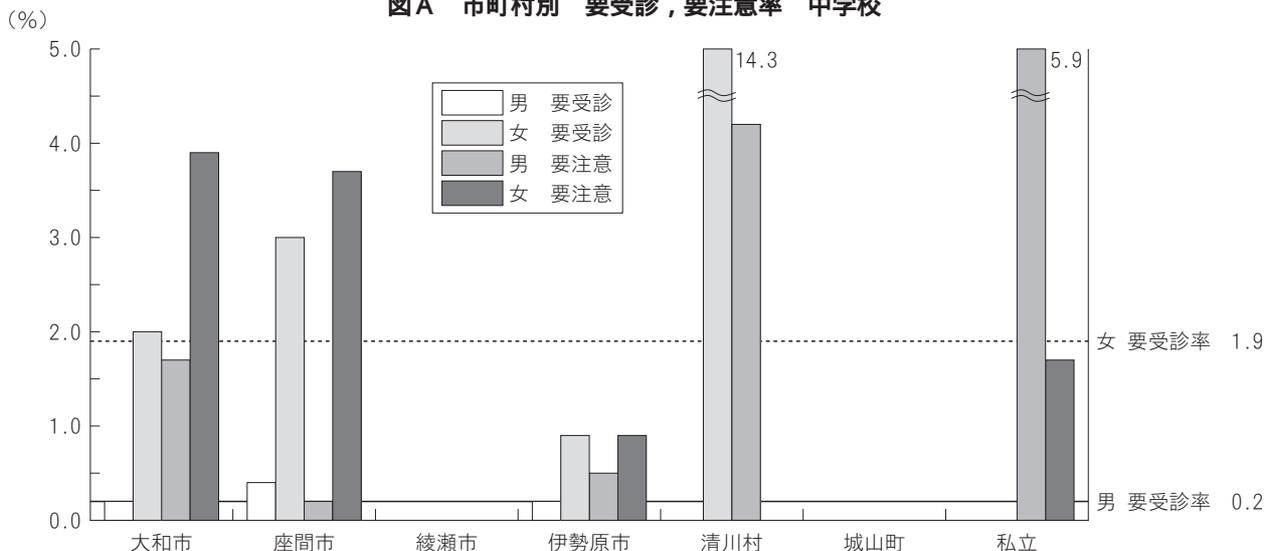
比較し、男子の要受診率が減少した。女子の要受診が高率なのは生理的な原因が考えられる。

表4に示すように、要受診と判定された186名中、96名から受診結果の回答が得られた（回答率51.6%）。回答が得られた96名中、受診された72名の診断区分は異常なしが2名、要治療64名、要経過観察が5名、未記入が1名であり、その診断結果の大部分は鉄欠乏性貧血であった。貧血は血液疾患のうち出現頻度のもっとも高いものであり、その多くは血色素量の低下として認められる鉄欠乏性貧血であるが、血色素量、赤血球数、ヘマトクリット値より算出される赤血球恒数を同時にみることにより貧血を分類し、原因を究明することが重要である。

貧血は多くの場合、皮膚粘膜の蒼白、息切れ、心悸亢進、嗜眠、易疲労性などとして現れる。貧血はその背後に出血（潰瘍、腫瘍、痔など）、溶血（免疫性など）、造血（骨髄機能異常など）等に関わる重篤な原疾患が隠れていることもある。貧血と判定されたら放置せずに、専門医による精密検査や治療、指導を継続的に受けることを勧奨したい。

運動の過多や不足、ストレス、栄養のアンバランスなどで貧血に陥りやすい成長期に欠かすことの出来ない検査である。関係各位のご理解を賜り毎年継続的に実施されることを切望する。

図A 市町村別 要受診、要注意率 中学校



関係の集計表は200～201頁に掲載